イタリア語

一　東京外国語学校創立以前

1　日本とイタリア

マルコ・ポーロが空想上の国日本をイタリアに紹介してから三世紀後に、東洋を訪れたイエズス会の宣教師によって現実の日本が伝えられた。さらに、九州の三人のキリシタン大名、大村、大友、有馬が天正少年使節をローマ法王に派遣したが、これが日本人による最初のイタリア訪問である（一五八二―一五九〇年）。この使節はイタリア人の間に我が国に対するかなりの関心を呼び起こし、また、これを企画したヴァリニャーノ神父によって書かれた『ローマ教皇庁への日本使節団』が日本についての情報をある程度普及させたが、四人の少年がかの地で見聞したことを日本に伝えることはほとんどできなかったようである。

それから約三〇年後の慶長年間に伊達政宗がその臣支倉常長をパウロ五世に遣わし、謁見は許されたが、通商は許可されず、帰国した時（一六二〇年）にはキリシタンはすでに厳禁されていた。時とともにイタリアその他の国において日本や日本人についての情報・知識が薄れていったのは、西洋人の興味が失せてしまったのではなく、我が国の

鎖国によってヨーロッパのカトリック世界との関係が断絶したためである。その間、イタリア人宣教師ジョヴァンニ・シドッティが一七〇八年に九州の屋久島に密入国して捕えられたが、江戸の獄中で彼を尋問した新井白石の著した『西洋紀聞』が知識人の間に西欧、特にイタリアについての情報を広めたといわれる。

我が国は一八五八（安政五）年に鎖国政策を放棄して、合衆国およびヨーロッパの大国と通商条約を結んだが、イタリアとの関係が始まったのはそれからやや遅れてからである。養蚕業の不振のため、日本から直接に蚕卵の種紙を輸入する必要から、イタリア政府は軍艦マジェンタ号を日本に向け、艦長V・F・アルミニョンに交渉を委ねた結果、一八六六年にきわめて温和な雰囲気の中で日伊通商修好条約が締結された。その後、特命全権大使岩倉具視一行の欧州視察の折りには、一八七三（明治六）年にイタリア国内を歴訪した。

岩倉のイタリア訪問とちょうど同じ年にヴェネツィアの高等商業学校（現在のヴェネツィア大学）に日本語講座が設置され、駐日イタリア公使館首席通訳官吉田要作が講師に任命された。この初代日本語講師に学んだジュリオ・ガッティノーニはイタリアにおける最初の本格的な『日本口語文典』（*Grammatica giapponese della lingua parlata*, 1890）を著し、一九〇三（明治三十六）年ナポリ東洋語学校に日本語科が設けられ、そこの講師に呼ばれた。その以前すでにフィレンツェのIstituto di Studi Superiori（現在のフィレンツェ大学）にも、一八六三（文久三）年に東洋語学文学講座が新設され、パリで中国語、日本語その他を学んで帰国したアンテルモ・セヴェリーニが教師に任命され、翻訳や著書によって日本文化の紹介に努めていた。

2　伊学協会と日本におけるイタリア語教育の開始

我が国においてイタリア語が学校や大学で教えられ始めたのは、イタリアにおいて日本語の講座ができてからかなり後である。明治初期に来日したお雇い外国人の中にはイタリア人は少数で、しかも芸術関係の仕事に携わる人がほとんどであったが、なかでもひとり司法省顧問として招かれたアレッサンドロ・パテルノストロという法学者がいた。彼は一八八八（明治二十一）年から一八九二年まで滞在したが、その間当時の駐日公使レナート・マルティーノの協力をえて、一八八八年に「伊学協会」を設立し、文部次官辻新次を会長に推した。そして随時講演会を開いたり、機関誌『伊学紀事』を刊行したりした。特に、伊学協会規則の第一条に「本会は本邦と伊国との交際を拡め互いに智識を交換し併せて伊太利語学を本邦に弘布するの目的を以て之を設置す」とうたわれてあり、さらにその付則には「……本会は規則第一条の主旨により目下左の事業に着手す……」として、「第一、本会は高等商業学校に向て伊語の一科を増置せられんことを申請する事。第二、高等商業学校の伊語は同校本科第三年以上に之を置くこととし生徒の望に任せ仏語独語の内一科を欠き其代りに之を修めしむる事。……第六、本会は尚又帝国大学に向て同学生に伊語を修めしむることを申請する事。……」（一八八八年七月九日）と伊語教育の具体案が示されている。

このようにして東京高等商業学校（現在の一橋大学）と帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）において日本で最初にイタリア語の課程が設置されたのである。伊国人エミーリオ・ビンダが東京高商と帝大の伊語教師を兼ねた。『東京高等商業学校一覧』（一九〇三―〇四年版）によると予科、本科とも仏、西、独、伊、清、韓語のうち一語、毎週三時間の授業を受けることになっており、おそらく英語以外に第二外国語として学習させたと思われる。『帝国

大学一覧』（一八九一―九二年版）によれば正課外の随意学科として伊太利語一年間毎週二時間となっている。

二　東京外国語学校伊語学科（新制大学発足以前）

1　イタリア語の教官と学生

一八七三（明治六）年に開成学校から分かれて東京外国語学校が発足した当時は伊語科はなく、また副科目としてのイタリア語のコースもなかった。一八八五（明治十八）年東京外国語学校は廃校となり、一八九七（明治三十）年に東京高等商業学校附属外国語学校が設置されたときも伊語科はなく、第二語学としての伊語のコースは高商のほうに置かれていたようである。一八九九（明治三十二）年東京高等商業学校より分かれて、東京外国語学校が独立した年、上述の七語学科に加えて伊語学科が増設された。当時の修業年限は正科三年、専修科（夜間）は二年であった。最初の年の伊語教官には教授はおらず、講師の伊東平蔵と外国教師アルフォンソ・ガスコおよび嘱託講師（非常勤講師）として吉田秀男が教えていた。最初のうち入学定員は本科が一応二〇名であったが、実際の応募者は一〇名くらいであったらしい。卒業生は四名から六、七名といった状態が第一二回卒業（一九一九年）まで続いている。しかも一九四二（昭和十七）年度入学までは大体隔年毎の募集であった。

最初の伊語教官である伊東平蔵（一八五六―一九二七年）は一八七四（明治七）年頃、旧東京外国語学校でフランス語を学んだ後、ヴェネツィアの高等商業学校に留学した人で、一八八七（明治二十）年から一年間その学校で日本語の講師を務めたこともあった。帰国後、東京外語が独立し、伊語学科が創設されると講師に任命され、翌年教授と